

LICENSED PRODUCT
© The Folio Company, Inc.
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



13
3011
13



正史實傳いろは文庫十四



まのふくろはたきと書しと花も川

流まじくともなは流行変化そは

中にも別々なり不同前は

旨やとらるる新く屬ひの革

る終ど言ふと文の喜ぶも

へ13
3011
13
特

義士は實傳ふ。しきか枝葉は
加えり。時代を世に傳ふ。字せしもの
新規不設。御色もわらぬ。成。
傍傳あり。その有官の老。顧書あが
夏やわらぬ。只官書。群の續輯を。
編めし。云。書く。と。り。又。同。ふ。

合せたる相輝も。結尾の明後日
云ひ。そ。と。だ。ら。く。急。か。ん。筆。の
子。孫。夜。る。を。こ。う。け。る。法。を。う。り。た。げ。
春。結。時。を。不。備。あ。る。の。も
恵。方。ふ。む。り。又。机。ふ
あ。り。あ。り。き。せ。一。現。を。写。す。と。く
京都記者 為永春水記



元辰の父を
 年をたると喚は甚しと丹羽の郷土ありしが

中比さる緒彦方一陸男せふ
 故つりて浪客なり
 世傳る業のむれまふ
 水汲しきまをりまじしと死
 判官の父
 行某殿
 馬上野
 かみおられし
 さる物成候えと
 して冠りあひ
 陸を成いさし
 風ふあらし水の中ふあふ
 年をたると喚は甚しと丹羽の郷土ありしが

原
 右門
 元辰



元辰の父を
 年をたると喚は甚しと丹羽の郷土ありしが

元辰の附ふらり二代の英名をたつとせ
 のそらも母も又賢ふしと
 父を教へてとせ

比類
 後と
 元辰



幸なく成法ぐ
 一端貪完
 身と責りふ
 けり子成
 殺して自害
 せんせーも
 終ふ幸福と
 得らふ
 りつる

峠
 房吉



原惣三郎
 元辰次
 今更を
 月也
 節を守り
 死後子のあふ
 良夫の在世も
 元辰が妻
 阿衣



おのれ
おのれ
おのれ
おのれ
おのれ
おのれ
おのれ
おのれ
おのれ
おのれ

阿針
阿針

水仕女
阿針

大星力弥
良金

あゝきみかたの
 身をすく
 うき世の身に
 かゝる雲水
 一

正徳
 實傳

いろは文庫卷之四十

江戸 為永春水著

第七十九回

常人の心程をうらぐれば物と何と外向と正義と
 見えぬものには心程をあらわす事の何れよりて余
 と惜むの勢うはむ四十七士の代へ何れも力ある
 親子が如く臆病未練の者あり何れもはじ先や善哉
 いふ時やとてせうみま君の内教懐くはるるふあ

さきか多くの人も競ひまゝに城と枕を討死し人
あそみ六十人を見悟先也 者もつらうんを并に一日の
勇めて赤坂を近敷せし一決争いし勇気も折
けく或の妻子のあひひろこを又いをざれば決をど
つらうと盟を致し中にも多う然る大星が深智
あるも許すの人の知慮を只一向にいあるまど始め
赤坂のつらう今日も今迄の勇とる近も愛せつらう
見ゆる者成先美書とる思ひひらうたも試しとるん

物とむひひらの密策を設け然も多れ跡めて居る
不へ何の日原のちあ城寺十内のあるつらう一くは
おつらうと一同へせして由一イヤ是の中あおは掃ひで敵も
系氏あ先日の基不敗地とされさうう合戦の恥辱を
さうく積りで今日の城寺成層つらうあ出とるさうまへし
いやた後でもございせんはるううあとな度よりほ
おるもあ今日もいんとぞんまゝに置くは
どらあ入まゝに由一ヤ私のは間うらら後定所

美酒が身ふあきて君ふもろしく居まゝいんぶ二三日
初ふとんご怖いやふ逢つてさう先高かへ狂び去行も
見合せて居る弁はへつ上更まきへ狂りあふでまへ狂
と云つて吐くあもろくろい更どが実と揚屋の
酒ふも香焼さう一高気成替く混儀一草一物
と出つけと知が途中で四五個の武士お出合つて
初うとんご斯くの仕合せサトわじし次第代物だ由ま
取つては紙入ふ金でも浮山たるま支り替同為ふ冠金

と巻つて流りが流るりと揚屋の書道や妓女
の知ろくあて多るんぶが送入つて居るのか
是が権谷の口家充松の鼻紙袋々々思ひれても
何分西月次身もあいつ作の巻紙袋々々思ひれても
宜ろさか行指も物取をさう中なる人知くはあつた色
るんぶ何ふ為らるる時ハ碎く居るさうさあのことの
みるさか始が醒つてさあ怖くさうしてさあで
去行と止くさうさう始る物で居るさう麻をひと

金が儲くありて郡吏の金銭貸附さる今は金銀
多分の利はふりさうと思ふあり考へて思ひ
あしと何の行へば金貸しを致さうと此後のをり
裏の明比へ去藏を建てどあまし一是ハ下賃をぞと
まじしてお物をど成形する用の心でござる程もさき
急ふ各藩者ふりまじさうと此後をい致さるが爲に
お出さう有金で一應にし玉さうと云々を唱へて
若書意を吸ぐんとと成二個の意ふか一極ありハ一に

酒の美酒先づ今日のおびまりしませぬ
大星及よのまじり救への底成を疑ひるさうと思へ
けしとぬ今の世に何とあおむて其の真の美しと思ひ
せぬが紙寺賣云へ何とあおむて其の真の美しと思ひ
存ぞる其故さうも客を先年のお人存何時迄病が
治起りて死なれまの物でもあいた程をさうと此後を
万若も此の地候令まじり然らば其の細が盟をさうと
者も此の年月がまじり法れて此後接のさうもあつた

振一也の揚る者もちのまゝいふ言ひれまへに後の更にハ
私にまゝいふ言ひもおのほりぬ大罪な後にもいふ言ひまゝ
うをいふで一向お仇討をまゝの口内伴に城も多く如何の
収りて伺ひづまゝに謝す呼びが来りぬとどろり箇に振おたりよ
るそれまゝにいへ行くはあなでもちの更にも今も原も
氏もまゝにそれまゝにさう余人も知らぬ我もお行も
おほいなるまゝに更にいふ言ひまゝにうへ行な思ひの
振おたりの所に作られし中にまゝにまゝにいふ言ひは又も

改めてお云は葉は何れにしてはあなを疑ひませうう今も城寺の
中にそれに強合援がまると云ふ振の言は御意振まうす言は若し
振が大きい強合が援がまると云ふ言は御意振まうす言は若し
ましたらばは恨み最初の一旦の怒みよりては是れ非お仇討と
思案も定めまして今もいふ言ひ考へて見ればは多く害害
易お討てる敵でいはしる是れ損じとは時あいせの言ひ
おおたりいふくは君の名を中にましては中におおたりいふ
敵討つらいふおおたりいふを致さる地名の言は



大星密策
義士の胸
中と探る

おの寺



大星

新編の御付て返すも余の作に似せしや小も思ひねる
西側あがり席おたせはあな(口)後一まじりしきふ
よて是等の次第成お咄しをまてうおあふ西記多と
頼ひさの物ぶト多ひるがうも文庫の裡より數十枚の
抄紙をバひらふ集りて兩個の希ふは出せば活石の
兩個も與え教ふ事せしと云抄もあるりしがなちんち
勅記として「高若くして柔あがる如令く秋の心と
お標りなまるむらりとも思ひもせ行指やう元元の心

底がは三行〜思ひをまてと拙者おかいその秋生ふ林
文を徳りませぬ一令代抱つ〜亡君の御を頼ふの化
お布ぬいごう〜お成今文書後がた紙の夏を仰せ
と最初の盟無病お遠致と夏ともも及が今と夏と
臆病末練は四研ぬき〜ハ元老と〜用捨ら致さぬ法
焼酎の一夏の思ひ止〜ね〜夏夏ハ秋の想底と徳
んん〜り〜一財の方便りま〜四返若がぬぬらり〜と
指副の二刀と〜紙ふりつけ頼ぬ夏て信書おわ〜

イヤコシたき勝そのやうふ後ときまなわお家再興
のも今くハた交とねざる由共一向ふ獲病ハ比
速成む極のいふまとも拙者ガとせる成者方ハ
あかき止る成はるいふも前まの成付でも行
でもは指もふよびて我等一人ハか陰れト云拙者ハ
又拙者のね念きりお致さううわの老われ世律文
ら返一ハとるの成さうハイヤコシ律文情なる
まいおめもせぬお家再興の文と云ふお孫病と陰陰一

弟と清きやうと致さうハ日比の麦及の山守候も
似合ぬ情多れ一言行ハ去るは盟約のきり是れとも
快付成お進め申と君はうふもは兼知がうく末練の
振込のりおいふハ故付の血多りお麦及のお首成付為
一ハ我の者の親成書りさるより代ハごうね元老
一射ハと云るハ絶と申さぬが我等の定候ハ有世の
間の返書と今一急承おいらうト候ハ腕ハ中書
智と云つて一付ふ切て控さるるが身立ふ十月候まで

十 一コしく系氏世自分の中へまゐる如くきこむを極むら元
 老の思へて成法くぐと考つるふ何れ海の正法のある
 支りとの奈のまゐるうらむさうさうどが大思と及の作ふ但せ
 け神文の先く我々がおぼろりしと今日もお暇致
 さうぞのちのまゐりうらむまゐりお暇致すのハイヤ
 拙者がお暇致すれと評せぬまゐり先づ
 も我々もお暇せらるゝと思ひさうお暇致すれと評せぬまゐり
 と評せぬまゐりお暇致すれと評せぬまゐり

せむむらゝ孫くお暇もまゐりてゑらゝ帰りのけり

第八十回

何處戒寺十月の垣谷家盛んるはの系那の苗も
 居成勅へて流くの男とありても都の裡をある所
 お借宅の好む及て致す人の御流るゝ人お教
 つて世傳りの物けお暇とて十月の妻と河丹の
 女児成お暇とてお暇とてお暇とてお暇とて
 女児成お暇とてお暇とてお暇とてお暇とて

老母と今く家内四人の養ひるがまゝ妻お丹と云ふ
心ざらぬ貞烈にして偽男子あそくめらんと早七と云
ふものぞく者らぬ魂の是どなき妻お丹と云ふ
軍く老母おはつて孝行にまのむしとて侍らば女
と侍りしよりそ女と侍むるのそらば漢お徳の史と
あびて和歌のなまもろかび然に十日か徳成と
東部おりりころ後おれそをど係送りて文の付後
救通ありそ八次の巻お侍りて後して史の同お侍り

おまき成るん分解べー一お八或日の変わるがお丹お老母を
侍ひて侍ありお侍りする留ちお十日の史の間おて教の
本など取ひらげ一個取りてある如くお史おひよお志
がくく侍り元よりお侍りて一アウお爺さんお扇を
奉りほしてヨ十一ナニ扇をが奉りてお史お侍りてお侍
地紙お入るはお侍り用いお侍りてお侍りてお侍りて
お爺さんお例奉り人お侍りてお侍りてお侍りてお侍りて
お侍りてお侍りてお侍りてお侍りてお侍りてお侍りて
お侍りてお侍りてお侍りてお侍りてお侍りてお侍りて

息子ありしが出来ざりて芳田氏より承りてお前さんへ行
老分のお方が東越へおまきお取替々くつておん
初遣ひがゆへおやうとおひましく月をるの中よ
あんな風信ぞきつとあつはしごイヤモウ直美他を
あふの物ぞ悪い美加の速く別あいののど今でんけり
丸腰で成りても何ともおんをたふりましくしうさぬ
東越の指子もけるお出のよれ落お吐くと聞くと東越
迎も同様の候で免有時日が延るよ連て同志の面も

追原が見つるうう系氏とお後して四五日お大早の後の
宅へ往くおあけの内法してんごお思ひの印を先
老の西取ねど同志の者もつれつと律文と通一紙封紙
おひ極おまては家再興の料とちお取サはお後を那
をりの正進者ぞう行が後とまきと既お先老紙一封お
あふのともあるの形勢ぞうおねらうと入る先律
文ともおつておつと帰つと神法お若のり算でんけり
何れおつとつらうと思ひあつる一する先老の思一



り才第の考ハ丁度系氏の中ハ孟後にしてよく知む
顕するところの又神文を造りしより其方が
同者の年へ遠くとも造る由実系氏源をたつて用むる
るの歌の由の辨せんて一時も其を造りしとらうといふ
及間の由行策を思ひますか何行を造りしとらうといふ
ふ少小十内撰を成りし十イヤ天啓の西陽系初より
何故中なるも昔代類づくはうを造りしとらうといふ
すも其の由の辨せんて一時も其を造りしとらうといふ

し神聖しし神文をも造りしとらうといふ
系氏は後代へ遠くとも造る由実系氏源をたつて用むる
るの歌の由の辨せんて一時も其を造りしとらうといふ
及間の由行策を思ひますか何行を造りしとらうといふ
ふ少小十内撰を成りし十イヤ天啓の西陽系初より
何故中なるも昔代類づくはうを造りしとらうといふ
すも其の由の辨せんて一時も其を造りしとらうといふ

を中出しのぞきまじりて「あまの宮にまふ少し
周のの被祚文サも私のもう同志の面（連）を振るど
傳ふそ来ささうとて亦行振る節成はけ
咄でも有るいふ人か海も有ましく思ふ西邊
でも是の景うとて咄一紙とて中て行振らる
ト云ひまじり考へまはる程でまじりま
又そのまじりまを那連水紙たるといふ
屋の懐で元老の物中とも荒馬寮とて尋まう

私に迷水お後とて通さるやうおぼしき
波う定めて同志の面（連）を振るま
又その後西邊を渡りまはるト云（八十回）紙びと件の
紙を渡すまはる中へ受領めは日（列）れてゆき
按多者初赤穂中へ殉死とて定せし一紙
連判を（ら）がいに必死とて日本物紙連判者
多け色紙を度改めし正義の者より一紙の
記清文を大層な紙にあらまはるより并まはる

此さんとはる遠慮津汁全ち有り丸
おて能湯ハ述見と未合せ終るつとりて同志の者
被記情文成述を不中少の是と未止してあるは
後を更取も有りその中少義事全決のよた書ハ情り小
信くして使不直一述中成之不直止と思ひ終る不悪口
做せる者も有りし々思ふ意深に終たる由も終た終るは
るべ誠事方一金金一々今度後後ありと一とて終る不直
ま一り終不十円方不直集り終るはと一た終る一途と

終る切る大早が切のよたのむ座あり我くが武運も
終る果るうけし一円小山科不押うけ由の之分不直後
終るしつうく遠慮不極まうは浪者終るの首付あり
終る終る果不終りり高の館不直入一とく終ひ終るの
終る外も有りしとてふめく大早が宅不直り終るは終るは
終る詰問ハ由言之ハ終る終る先ハ終る終る終るの
終る此座集めりて由是せり拙者不直り終るは終るは
終るごまう終るも終るの八月と不直一と月日の直不直と終るは

一、味の中ふも、愛のも、何れも、さき、の、亦、わ、が、密、る、の、顔、方、
世、ま、る、夏、も、何、ん、り、と、矣、と、各、方、の、を、座、成、標、り、は、不、
二、を、な、れ、あ、つ、ら、の、成、ん、け、て、女、坊、に、は、し、り、懸、て、六、布、を、を、
道、せん、り、ま、る、の、間、も、あ、る、べ、し、は、我、等、が、獨、中、を、も、疑、ひ、
の、つ、ら、り、ま、る、れ、を、密、る、の、成、法、ま、ん、あ、め、て、心、深、く、海、の、ま、
糸、せ、が、長、之、の、而、も、雪、立、天、も、昇、り、の、心、比、し、と、飲、び、あ、る、
ぞ、な、り、あ、り、り、る、

正史 いろは文庫卷之四十

實傳 いろは文庫卷之四十一

江戸 為永春水著

第八十一回

余、が、ま、り、由、ら、之、成、り、因、志、の、者、の、心、座、を、持、持、り、思、ひ、
故、神、文、も、夏、も、何、ん、り、と、矣、と、各、方、の、を、座、成、標、り、は、不、
その、う、ち、あ、の、夏、も、何、ん、り、と、矣、と、各、方、の、を、座、成、標、り、は、不、
今、後、因、志、の、二、も、な、れ、者、の、心、座、を、持、持、り、思、ひ、
最、た、の、り、思、ひ、が、夏、も、何、ん、り、と、矣、と、各、方、の、を、座、成、標、り、は、不、

其妻よりあり実来にたる同志の若者候く其の如く成
す血を穿てたる如く如行する其謀の如くいしを倣
つてもさうしき福が先光の造らふおんりり叶のるべ
芳因蔵寺の内りきん軍一東一わく吐士どりの
心ざら結めさせあらびび大車成行由中其のやう
りあふ大軍是もまて大切なる其の如く其の系師成
今あがく難きがたに候れが名代にしてはちか
をづれお其まひまり系師おれてあるごとく候のよしと

あひすうをねがはるる一候お及らび男不肖の
系師名代を命せしめありがたに其の如く
おんおのりし其の如くおんおのりし
ひとりの種ひたる系師母おんおのりし
りろとも古くある赤尾の左に忠をせしめがけ
赴けは生かすべし古くおんおのりし
けせのんおんおのりし母おんおのりし
余あるがう候をいふ候しけしは須臾が後には

よおちのヨロハイたるうすすの光を敷りまきうト系
種皮のうく度ふをれお衣も洗滌成行よせてはいて
端よりわづり来る。お母衣あひ思このお申りもさく
石棧のよいか形皮おしきしてえを敷かひのくさ
ません私を敏ううは案を成成ひるぐうまゆりませうト
ぞんじはしごがめ周度がきさうまうて母手あうせわらう
とも候令お希がお帰りでさうてお糸作うう度くあさ
よこしとお是のううううう方の無事申もけさの無事申

知れて業坊して居ます。お申年がうをわうて形皮うんごが
度うと振子もさうつてあんを同お及婦いひるるのヨ
まおお茶の箇中申もお夜がやうくして是のまうう
おの毫ふも強居サ那見え居候がらんまふ成長あり
虫寄もさくははどの所言成あつてはさうりまも知れ
てあてどんかおおむらしくあつておれあひのヨ。ままご同成
見えさあひのうかお爺さんの帰りのものもあつてびふまふあ
おごうあま。おハイ今ごまを皆申で喋りて居ます。お



「是れはまゝ思ひます」ぬき殺し勿論中ふ居りませ
た時よりありやく傳候もございませ〜が同士の者に
お愛りが長くございませ〜にお役もお返し
ませじ、長今より大甲氏とどめあり〜お身のはり成
定めの中よりありませ〜さう〜お母様成お教へませ
候はれございません〜由疑念成お晴〜捉び〜妻お
あつておが同御方とお違ひおありませ〜の成おありませ
〜とやういませ〜おありませ〜お成教へく勿体ござい

件させあり〜念じ〜候かして〜備向けはせ〜せ
おい点取ませ〜お交りおあり行の源の極もあらう
推てもございません〜お成候〜お侍も居ませ
随分中もございませ〜お交りおあり候〜お成候
とあり立て目の中も候もございませ〜お成候
為さるあらしう〜今夜も宵か〜あつて〜お成候
おが起させませ〜お交りおあり候〜お成候
おしお有難き有返着〜お成候〜お成候

第八十二面

備次の船を晴きより母もともく起出くまづ
焼版とあつて是と並版お福あへるとは成版
世伝あそびぞ見るまてくみんちついの物の裏なるま
のこる成お氏のこも思ひ盡して面の色おも顯さば
充冊とはじめ毒牙おも是今世の別せとおまは程念はふ
喉迄て糸尾の在成成をなれ七世をわたりもあつて
けしふるや並版のはふりそればまのちりの本も後なる

原一書ある本もまよりなりあふ石お腰もあけく
かの焼版とより出てもお母人の志成受るもこれ成版
ありとあり裁きり焼版の四のりしとる舎して脱ふ
後お満くわが残る一皮は候おふ時かごのりある
ゆへ味ひの重るべーいゝるあさんといんぬもわが
体もさる本の指お旭の葉うけてあけりうらめしうらめ
版と旭おきうんと本の枝の種よれあふさ一巻けは併の
旭も様一巻お起りりてくまをりてを何とるやと

見ぬとまごぶかのおへ含りど 葉の中をふらふ鳩おきりま
仲うらふふはちあつい思ふやう鳩も僅の小鳥るれ
るは思ふたの期のと一況て人間ごあつるまは夜
君妻ふ頼るべ討死する。後切らうりがま念一と
るれりの残傷りかざりて別まう残告け後み実を交
あつて親の氣種ふかりありの成子のまわふありぬこ
眼も致るせめふべ一是と迷くもむげらぶともあつと
ぶたふし流石強守の口ちも交はらうて雨のまにけ

一足とそも進まのびに寧ろのまふなて返一子細奥み
うもぬ一改めて今生の暇を乞ふて出ませんと元
来一方と足とあらう日中脱ふ香り比再び我が
家ふまゆれば母成はにあ妻も分もうあ後まらねあを
問へは失念物成致せ一由帰る一休ふまひほして
奈向の者成ま境あはしわあなちあつて一問あつたり
母のあふ成成まげな一私がま帰るまも外のま
ちいごまのません今くいの巻振るくと七里のて休し

あり成りし心遣と見えしつりのまお物持りし
實小今文中上ます中忠入すもか推尋ふまにしも
凌つび大軍後をばにわ四千人合せ高の屋敷へ
私入にし師車後のお首成中受人とりわけ後の企
さまねば再びお母さふお月お舞るまを出来せん
お年あつたつて一個の母さふらふお例お祈りして
孝者言と今致一得まね成りは是れもあつて
お年あつたつて一個の母さふらふお例お祈りして

思一お不孝の私一行年お帳をやりこみます中へ偏お
お頼ひ申す声うらませと物持をば母の及く
涙中お母さん宛あつち宛の母へお祈りごんるお
涙しつちお私のおつち思つて居るを吐くと受てお祈り
あんま扱がしい受らるよお祈り殿さ由一お義と立て
お祈り申へ縁へ縁しつちお抱とつてお祈りお祈り
お祈り申へ縁へ縁しつちお抱とつてお祈りお祈り
お祈り申へ縁へ縁しつちお抱とつてお祈りお祈り

孝行のまゝに他の夏に竹も思ひのたゞ一冊の本を成
遂中しりふ是候で後足とさるるがよのこけうの改め
最後の盃と為させうト再び酒の用を成を成子の
名残しをかりて面も愛ひの色も足ぐば換娘よげ
身も母の体も竹もついで女娘して思ひがけをもも寝も又
我家の御存不体にがむお一日とせし夏も次の朝の
まのあより程遠く起せしりまがくは及個くとも
ゆきとさるんとさるお前の朝に我身より是く起るる母

るは世の中十二

親が竹の行もる為うりけんまご月成見せし体もあ
ぬと暇もほげむと物とのあまき夏もあつぐれと空く
森もづまりて在る成記にもおんおつげと姑く
是も成時わぶお夜も明れとあわはし一集のあまの
朝にこそん母の御存不体にがむお一日とせし夏も次の朝の
備して自害はしらつりさるるふたつに程のまご成
あ何と寝きさげば妻も竹も距よりて周章限り
あらざるのま何と群もあつらうけりて中におあひまつり



此は法を傳へたるに
或は法を傳へたるに
或は法を傳へたるに
或は法を傳へたるに

一 孝中ありて
孝中ありて
孝中ありて
孝中ありて

孝中ありて

情かぬ老の命
情かぬ老の命
情かぬ老の命
情かぬ老の命

孝中ありて

不孝の者も
不孝の者も
不孝の者も
不孝の者も

懐くあつて七甲の及の海をまじれおよしなれをせりよんと
悪きもの成せりおふけは最期の後をせりおふくると
おれは命を捨てしごとくいげまぬるは美色の極りの
世ふく報ぜんと流石極きはちかき此敷おしと取付て
最後不えふも款けおらじ思ひお熱す中もお後も
候ふお乱し流石お中もあつりしが初と果てきまふあつ
極は母の亡骸と菩提の寺へ葬りて記念にお吊ひ
なごせり是等のまふ目救済ても年二十七日お及びおのちり

母のまふくひまらち極も大事おおまひる親おらと
りまぞらけはほしてちかきまふおねびおまふおのこも
初のまふんと妻とおふおひかち一節の別を成ほす
も手お山科おま殺す大早くまらるおまおまの御の
對面して由一や見おたおのは極おまおまおまおま
より目救も延びる人おるおぬ敷色とん信まおか
西不救とでもすちかきまふとござる子一十二おのまふ
舞うもすまふおごらませんが思ひまおまおまおまおま

医者よまゝ一とじハ利もぞ見えせむお去冥一葉わねら
飾りて並けど或の婦のうらまはし地面の貴冥令の世話
又の産後の百おさよ成親まゝと業とせ世よりお解開
送者もろがせ玉の冥東也希の編ふたろへ一なるかの
お茶葉の叔又もろゆるお茶葉の行より一と由る之由の
指もよお直布ののりもくは成村の体もたろふ迷く
遠方へ送進つるべ一四ふよろその師也より寝美ハは山
わらんといふ文をなむわりじろぶ美あり懸お月のもる若

お大星うさ取入をくおくお直の位などいじ成つけを
窺ふところ酒おけ振代受かろくお帰りのるととてハ
多く或と兒を刀をる遠へ又の懐中おなご 城を
るく書文をなむるもく行の懐しき書おなごの
らと肉を改めんれど武も成構ひし後取を歌や
揚屋の虫出しをかりあてはしと思ひるもあく冥ふ
本心放ちあて仇成鞍ふお存さんぶら何々きやうふも
思ひまゝいじ程も冥否成揺りさんともおの縁の

者の始と一廿五才ふりてその名氏お針と傳ふ
 心利なる如ふりしと大星うへ口入して下女を
 小伝迎ませ内外のるふは再々一傳の
 ちるるるへ内をせよとそ云付たるけお針の事一
 ついて又二伝のお話りなり波の巻を足して知るん

正決 いろは文庫卷之四十一
 實傳

正決 いろは文庫卷之四十二

江戸 為永春水著

第八十三回

大星の語より一者の伝へて推せしるれ
 江戸の由りも伝へるる只此傳へしと一
 いろは文庫の巻物と思ひし中ふりては傳力
 父ふりしと伝へるの始お針と傳ふ
 又ハ傳へるる如ふりしと切合はせしるる

大まういありはしちま子カ「そのつら大まういあれこのまてら
 ろんの宣腹とれたのふ味力のなしや放むも法つけが
 更とんご更ふまの金体子の山味あめ女氏えまや
 掛り金バ直ぐさるヶ計「あにどれが子かあめらう山味
 ろの「漬付であまますのの子まてらまじふまのあめ
 更ふありまてらおなるさるヨ行はほしてまてらまお後の
 大まういあり者氏遠方のお宅「の直れまてらまの行は
 ろ思「まてらまてらまてらまてらまてらまてらまてらま
 行はとまてらまてらまてらまてらまてらまてらま

ろいろう喉とまてらまの更サ計「まてらまてらまてらま
 ますけれどまお捨の者ハ八味在の茶村まてらまの
 百姓で助者ごし「まてらまてらまてらまてらまてらま
 麻のふされま引「あまてらまてらまてらまてらまてらま
 中てまてらまてらまてらまてらまてらまてらまてらま
 たら又も切らまてらまてらまてらまてらまてらまてらま
 候で親におまてらまてらまてらまてらまてらまてらま
 是「まてらまてらまてらまてらまてらまてらまてらま

九いお成極くせういごん流りの付ませんりま「若くはく
園のうら内院で自色あねの力ちからでも愛拂あいつらのくふるふ合
せく重かさくかの夏なつサし「夏なつごうあえまら合あはちうら「成
極あまびとかと申まをのぞごだすますヨカ「ナニあんま夏なつと怖こわら
く西にしさい思おもひが出であるめそこのうまぬで付つくりんぞこひあが
中なかあるう出であるう付つく「おも行い成なりを作つくらと夏なつの松まつえん
ぞんもんおまがごういませんうう大だい夏なつ夏なつサカ「ナニ若わかく
飛とうおまがごうい付つくり行い成なりとすくのいんじん「おまの
目め

ふるんぞ成なりと「ら「成なり「ませんが夏なつを夏なつて行いふ極あまバ
そのカ「子こが出来できまじおまふるのいんじんとえやうようと心こころよく
サト云いひまがううも成なり法ほうま「く引ひ寄よせる夫つま似に成なり成なり成
是こゝバ「計けい「吾われも若わかく若わかくぬご子こエあ「ト知しひたがう
振あ切きく「逆さか出でく「性せいく「と「殺ころすの行い中なかう及およ古ふるの
端はの押お丸まるり「成なり成なり「と「流ながく「夏なつ力ちから強つよく「夏なつ流ながく
拾ひろひとり級くわいふるりしと度ひらげてえればお計けいどの「殺ころ井い
よりし「上う成なり成なり「夏なつの切き端は怪あやし「うらう中なかと續つづバ



お
お

葉て中ぬらんを先目より丹て四圍
 子紙一紙おのりも一とあふらじしに
 只不あざうの事のもめて列お怪しき体も
 口をうけられたうたの罪も

トむわりは破れまゝにわらうさる成力強は法しと後
 獨り息ひき居りたるお針の大事の毎の強成より
 為せとも心法ははるる後務を立おわねお捨とり

小女が強物成して居る成見し計「チヤお捨ねん大事
 精成出して強のそのおまの十強成履ておまを胞衣
 かむむといふぜ「何ぞと胞衣とん計「アレまうけ強
 知らぬのりふ赤子があお捨お居るうまの強うも
 紐の中うお物があはし先お針を居る胞衣といふ物
 天宮へ冠して居るサ更さう一物びでもさるし
 その胞衣の紐が赤子ふかしく強を産むお骨が折ると
 ちよま更でゴト云ひれてくると親あうわが素知らぬ

体てい中ちゆう捨すて一いっヲヲヤヤ吾われ子こ正ただ私し一いっ身みハハ後のち小こ赤あか子こももんんぞぞの
在ありもあらいの成なり計けい一いっアアレレササおお後のち一いっををのの君きみヲヲ放はなつつ
知しつつてて居いらるがが子こままおおもも思おもへへるるいいううももんんをを精せいふふ
あありてもも置おひひややるるおおももいいけけままどどももおお若わかががちちみみりりがが
互互々々々々團だんららややううままままもも出でぬぬハハ為なままいいりりととままがが若わかあありり
ららままららめめららずずくくののおお子こトトままりりてて這はつつてて團だんららにに体てい中ちゆう
にに俯うつむ向むかひひてて居いらるじじがが捨すて一いっおお子こままおお若わかももんんをを精せいふふ
ののどどくく一いっ惟ただおお子こままららててもも大だい体たい極ごく子こままもも知しれれるる
下

おお子こ那な若わか良よしおおののちちをを一いっそそううをを教かへへ一いっ々々おおままをを
ささううけけれれどどももええんんどどほほままののでで方かたのの娘むすめ成なりつつままにに答こたへへ
ままるるののおおおお娘むすめごごううおお若わかののままもも何なにもも思おもひひももおお在あららううささううとと
今いまごごいいわわううととををいいははすす一いっんんとと思おもいい團だんららにに假かりををああららるるのの
ままどど一いっ向むかふふ平ひら氣きののササおお若わかごごううててままをを精せいふふささねねるる
曉あはあれれ一いっととややととららいいののままああとと世よををああららううててややらられれるるままをを實じつにに
ううままららるるいい吐はきき一いっごご若わかううととままををいいははすす一いっ内うちののおお娘むすめごごさんさんおお
くくよよらられれるる仮かりおおももああららままいいうう何なにでもでも田い舎やのの爺おやさんさんとと

お後として子切のめしと七十をあるのどか動する
とあらが置せ若お若この子孫で従うが事
内花ぐ智あ成貸て進るめうウとらあ種合
つごり重く方の振方成付るが肝心ご捨
行もかお知つてお在る中後と知が冷る方う
云ひまご子実正のたして更る若良物のおまが成
あんかお後ふるこのどか子行年後生ごう
咄してお其のどかいヨ計一そり中おらて後
見ますで

昔方もあつた者ごうお若のあらお思いと
むかしと咄し成るものまそり中實の今
切のともろハ行成爲中し思ふのどか
お若の源切お多てお其のねと寔お娘し
おのやうな田舎者成若良物が行も思
更ふるこのお真加るの更ごおらつて居
けうんお合成りるいんごそんな勿体
ますののう村一更上中その成で中
られても、云分ら

少くも外周が悪くうらぶ中うらぶその時ふるうと
後悔成るうらむ仕振がるいうらむ私のもよ中うに
行でも今成重くと見せらうらむ石が金利ふるう
ても友の友居ハ跨りぞ出るいと後を居てく四境は
夫の家基骨ぶりの成意友お意をもあひあう
是のふ遠いひるいうらむ友やお希の體の成育ハ何れ
ふも出朱ら多子ト例う中うらむ禁付ても正遊一島の
お捨由へ行し田居もまらうらむて只りくあう居る

おしも。アハトト嘆拂ひして表の方より由良之助がま
ゆりぐる振ふ由居すれうらむとわ中うらむあ計
ハ故業とさわらぬ体おて他の由しお終らうらむおひ
くと居るしはうらむく不飲の女と居るうらむ

第八十四回

大甲のふも足おひまうらむ一問へおれバ
お計ハ踊りけりうらむ茶成成びぐおうらむ
針ハ足おさぬ大もう今日もおゆりがおおまうらむ

こま由一由ゆりのゆりもゆつても酒酒の大大そうそう春春どど行行ななとと研研せ
居居るとといいつつるる汁汁「ああままいいででいいじじががいいまませせんんりり研研ふふららいい
ああがあるるはは酒酒ででここぼぼいいまますすのの代代由由「ああままいいででいいじじががいいまませせんんりり研研ふふららいい
酒酒どどううもも研研ららせせるるもも若若ししううああららううとと中中ののおおぬぬいいららくく
物物のの分分とと者者どどもも更更ののししううとと自自色色のの局局もも不不備備もも見見らら
ああままいいででいいじじががいいまませせんんりり研研ふふららいい
松松のの更更ふふははののししううととおおぬぬいいららくく
とと中中ののおおぬぬいいららくく

由「いいちち更更ででのの冥冥東東中中のの日日ありありととおおぬぬいいららくく
るるももいい汁汁「いいちち更更ででのの冥冥東東中中のの日日ありありととおおぬぬいいららくく
費費ととせせるるもも若若ししううああららううとと中中ののおおぬぬいいららくく
冥冥東東のの方方とと在在願願おお出出けけるるもも若若ししううああららううとと中中ののおおぬぬいいららくく
ああままいいででいいじじががいいまませせんんりり研研ふふららいい
男男のの汁汁「いいちち更更ででのの冥冥東東中中のの日日ありありととおおぬぬいいららくく
おお置置「ああままいいででいいじじががいいまませせんんりり研研ふふららいい
おお初初もも若若ししううああららううとと中中ののおおぬぬいいららくく



おひと一々う志ふ金の情の成るはひはのそと
おひと止ていんう望くむかりしてもあうきげかの女中
笑の程結汁とやうで肉をひびく儉約として外へ出て
今成きふが是も笑もあうきげかの女中
おれが格と氣ふ入る居る橋本の柏木とのかき更成身
後して別へ吸ちる酒の花とよむ方が金とめりて
出るやうが外へ出てきふより余程儉約ふもあらうし
そのいふちりつと
いふ人成一更のあや娘は成焼うといふ女房のけの

親仁が合らうい更をりふう返して仕度一年はふ
ある牌の族へ立せる二個の子供を圍るうう世話を
あうきげかうといふ親類もあうていれれば何をもあうい
あいのありのの圍るのい都若葉の孫たうごあわいも
知つて居るをり牌を編の男ごうう自色が括西程ひ
せむの成中まうく笑う成中まうく笑う人世界の御門
あも赤尾の擧げ浪人が主人の志と成時とうとあうせむせ
自分の身擧へるうりあう揚ひも擧うて擧病者と成

させるも残念げんねんでうしつりぬまでも統制たうせいの元もと終はらと為なり
と為なるの進すすめサ自己おれざうくその位くらいを更さらへ百ひゃくも形かたち知し
有あて居ゐるけ色いろど名なをあらうより得とくの世よの中なか惟ただも
頼たのみもあふい更さらふ骨こつ皮ひおろし揚あげくの果こあやう大だい
事ことの命いのち銭せん捨すて中なかうる形かたち音ねを更さらへ昔むかしははらうと
らうが今いま附つくえんなる庶しよ民みんを更さらへ者ものがたつめのもり月つき己おれ
玉たま小こ居ゐる附つくえんの田いん舎しや更さらふ更さらふ云いふそえんを附つく
た格かくの氷こほりが後あと小こ深ふかいんせうの了りやう者ものでい百万ひゃくまん年ねんも

長ながく成なりて好すむ更さらして来きしむのが為ため世よのあつた
けれとも怨うらみ有ある孫まごためぐ悪わる世よ信しん成じやう中なかのそ國くにのヨ
然しかううしとあつて帳しやうを出いすうみも渠あれに状じやう在ざいの時とき分ぶん
うり使つかつて播は代しろの者ものでうし今いま更さらる者ものもあつた
出いすは使つかつておねいふ報はうしりひのあとの事ことが
先まづ自おれ己おれの工くわう更さらふ郡ぐん奴にが歳としの月つき色いろお二ふたつとされた
まじまんざう中なか小こ周しゆのるい更さらる者ものもあつた
うらうらで竹たけ根ねう若わ孫まご成じやうしてんそくは其その色いろまいたる

とらぬ中うしあまを交とまを伎倆やどの女由四すを敬し
疎たらしめぬ深まのいも怖い憂をもるを後つて少
の間我情とまればとすあふるは仕事一毛も男とや
あまを交はたか仕るれし而為るれば造化もるん
あまを交ひるがうも周りに教をけし
うとぞんどほしうち行る交をも初ふそんなるが由外
まよとののりま事と由「サア是のむ極速に感る飲とい
あまを交もねても是を女つて異るいゆかう自己のやま

叶ひるいともあめのごうし行かどりの類とて人のい
若まの熱く仕つとく人の納束の二十あの外あま
別院の房中うもあらうう骨身おて是るが宜いト
十分さうてゆしあおけのり少、業地はてし
まを交作らまを交う行とまののむ由をまてごう
中ううねでゆあから何れりまを交うて人まを
トはあまを交しご後の中ぐらもやとすあ世しり
是れりうの立あ其ううとあ地かあらうらうとあ

夏の間、夏をくぐり、人の世の
 経もどろり、風もみも、
 形をと取、ひておし、
 推しへり、孫たち、
 ろろん、開き、次の編み、

正史 いろいろは文庫巻之四十二



